

それを支える栽培技術が不十分では多収は望めない。今後、技術についての一層の普及指導が望ま

れるが、筆者もこの面で、いささかの微力を尽くしたいと考えている。

# 緑肥用エンバク「ヘイオーツ」

雪印種苗(株)中央研究農場

高山光男

堆肥・緑肥等の有機物利用による土壤改良の重要性は十分認識していても、堆肥の材料の入手が容易でないこと、あるいは堆肥化の手間のわざらわしさから、堆肥の利用は極めて少ない。また、緑肥についても、その利用はまだ十分でなく、畑作地帯の土壤は有機物が入らず、化学肥料多投による連作栽培というのが実態であろう。

短期輪作内へ後作緑肥として利用できる、初期生育の極めて速い多収な緑肥用エンバク「ヘイオーツ」を紹介する。

## 1 「ヘイオーツ」の特性

本品種の名前の由来は、乾草(hay)に適するエンバク(oats)からきており、府県では乾草用エンバクとして利用されている品種です。

表1 「ヘイオーツ」の特性

品種名	初期生育	出穂始	葉色	葉幅	茎の太さ	茎数	草丈	乾物率
ヘイオーツ	9:極良	月.日	9:濃緑	9:極広	9:極太	/m <sup>2</sup>	cm	%
ヘイテ	8.0	—	4.0	6.0	4.0	1,163	74.2	10.8
前進	5.0	10.9	7.0	5.0	6.0	663	81.2	14.4
太豊	6.5	—	5.5	7.5	7.5	373	77.4	11.7
	6.5	—	6.0	7.0	7.0	519	78.7	13.0

播種期 昭和59年8月11日、収穫期 同年10月18日

播種量 10kg/10a

表2 エンバクの緑肥栽培試験

(昭. 58~59、中央研究農場)

従来のエンバクは、稈が太く、葉幅の広い品種が主体ですが、本品種は稈が極めて細く、葉幅も細い特徴ある品種です(写真、表1参照)。早晚性は、極早生エンバク「ハヤテ」より約10日前後早く、早生に属する品種です。従って、道内において8月上旬播種では、「ハヤテ」は年内に出穂しますが、「ヘイオーツ」は平常年では出穂はみられません。また、種子の単位重量当たりの粒数が多く、このため単位面積当たりの株数が極めて多い品種です(表1参照)。



「ヘイオーツ」の生育状況

播種期 8月10日、播種量 10kg/10a

収穫期 10月18日

従って、収量性も表2に示したとおり、かなり高く、各地において、緑肥栽培にヘイオーツを試み、その多収性が評価されてきています。

次に、播種量と生産量の関係を表3で見てみます。「ヘイオーツ」、「ハヤテ」のいずれも播種量を増すにしたがって増収となっています。しかし、「ヘイオーツ」の増収の傾向は極めて大きく、「ハヤテ」に比較して、増収の割合は2~3倍となっており、増収が期待できる品種でもあります。

次に、後作として利用し年内鋤込みを想定した場合、エンパク以外の作物も含め、どのような草種・品種が適当かを検討した成績を表4に示しました。本成績は、各作物の緑肥栽培で多収を得られた播種量の場合の比較で、本成績と表2、表3を併せて検討すると、夏播きの後作緑肥では、エンパクが最も好適している作物であり、次いでイタリアンライグラス（マンモスBのように当年出穂する品種）が好ましい。また、エンパクの中では、やはり「ヘイオーツ」が最多収の品種といえます。

## 2 利用方法

一般に、緑肥の利用方法には、栽培法により、次の3つの利用形態があります。

(1) 休閑緑肥：畑作物の栽培を一時休閑し、トウモロコシ、ソルゴー等を栽培し、適当な時期に細断し鋤込む方法です。この方法は、耕地面積に余裕のある場合に多く利用されます。

(2) 間作緑肥：畑作物の畦間に緑肥作物を播種し、畑作物に影響を与えることなく緑肥を確保する方法で、最も知られている方法としては、コムギの畦間でアカクローバの栽培を行う方法があります。

(3) 後作緑肥：早出しバレイショ、スイカ・メロン等の収穫後直ちにエンパク等を播種し、年内または越年後に鋤込む方法であります。

以上3つの利用形態のうち「ヘイオーツ」の特性を有効に活用できるのは(2), (3)であり、その栽培方法を次に示します。

表3 播種量と生産量の関係 (昭. 58, 中央研究農場)

品種名	項目	7.0kg/10a			11.0kg/10a			15.0kg/10a		
		全生重 g/m <sup>2</sup>	全乾物 g/m <sup>2</sup>	同比 %	全生重 g/m <sup>2</sup>	全乾物 g/m <sup>2</sup>	同比 %	全生重 g/m <sup>2</sup>	全乾物 g/m <sup>2</sup>	同比 %
ヘイオーツ		5,184	614	100	5,528	751	122	6,393	833	137
ハヤテ		3,552	588	100	4,168	624	106	4,059	671	114

播種期 昭和58年8月9日,

表4 草種間の生産量の比較 (昭. 58, 中央研究農場)

草種名	播種量 kg/10a	全生重 g/m <sup>2</sup>	全乾物 g/m <sup>2</sup>	同比 %
エンパク(ヘイオーツ)	15.0	6,393	833	100
エンパク(ハヤテ)	15.0	4,059	671	81
エンパク(前進)	11.0	4,289	444	53
イタリアンライグラス (マンモスB)	5.0	3,982	652	78
ソルゴー	8.0	2,188	327	39
キビ	2.0	1,322	270	32
ヒエ	5.0	3,202	452	54

播種期 昭和58年8月9日, 収穫期 同年10月17日

(1) タマネギへの間作緑肥：タマネギの収穫20~25日前に「ヘイオーツ」15kg/10aと肥料(窒素、リン酸、カリを成分量で各々4kg/10a程度)を混和して播種し、タマネギ収穫後も緑肥栽培を続け、10月下旬ころに鋤込む方法です。

(2) 後作緑肥：バレイショ、スイカ・メロン等の収穫後直ちに「ヘイオーツ」15kg/10aと肥料((1)タマネギへの間作緑肥参照)を混和して播種・覆土・鎮圧する。覆土を怠ると昨年のような旱ばつ年には、発芽が著しく不良となります。播種は8月上旬までには終了し、どうしても播種期が遅れる場合には若干播種量を多くし、草量を確保したほうがよいでしょう。(スイカ、メロンへの導入方法については、本誌第31卷10月号「野菜畠の緑肥栽培と土づくり」参照)。また、苗床への播種期が遅れ、ソルゴー等の栽培が不可能になった場合にも「ヘイオーツ」を利用したほうがよいでしょう。

以上のように、エンパク「ヘイオーツ」は緑肥利用に好適しており、「ヘイオーツ」の利用によって、土壤へ有機物を投入し、併せて土壤の流亡を防止する等、積極的な地力の増進が望れます。なお、土づくりについては、本誌第31卷10月号の関谷長昭氏(天北農試)：畑作における緑肥作物の上手な導入法も参照して下さい。